

## ワークショップに関する理解向上を目的とした 教員養成授業におけるコース開発<sup>†</sup>

森玲奈<sup>\*1</sup>・内記麻子<sup>\*2</sup>・北川美宏<sup>\*2</sup>・木原俊行<sup>\*3</sup>・小柳和喜雄<sup>\*4</sup>・山内祐平<sup>\*1</sup>

東京大学<sup>\*1</sup>・SCSK 株式会社<sup>\*2</sup>・大阪教育大学<sup>\*3</sup>・奈良教育大学<sup>\*4</sup>

教員養成課程の学生を対象とするワークショップについて学ぶためのコース開発を2パターン行いその評価を行った。1つはワークショップの参加体験を含む全3回のコースである。もう1つは半期のコースであり、ファシリテーションに関する研修と2回のワークショップ運営体験が含まれている。前者ではワークショップへの知識・理解の向上が確認された。一方、後者では、受講生は教師とファシリテーターのあり方の違いなどを考察する等、深い気づきがあったことが示唆された。

キーワード：ワークショップ，ファシリテーション，教員養成，高等教育

### 1. 問題の所在と研究の目的

#### 1.1. 社会的背景

近年、子供向けワークショップの普及は目覚ましい。文部科学省では平成22年度から、コミュニケーション能力の育成を図るため、芸術家等を学校に派遣し芸術表現体験活動を取り入れたワークショップ型の授業を展開する事業が実施されている(コミュニケーション教育推進会議 2011)。実践校からの報告によれば、ワークショップの理論や手法を備えた外部講師が授業に参画することは、児童・教員双方に学習効果をもたらすことが指摘されている(コミュニケーション教育推進会議 2011)。今後、学校と外部団体との連携支援は、学校現場にとっても重要な課題となるであろう。

一方、現時点で積極的にワークショップに関する外部団体と連携する学校は、まだ一部に留まっている。

背景として、小学校教員の過密スケジュールなど制度的要因も考えられるが、ワークショップに関する情報の不足や、教師の信念体系との葛藤が主要因であるとの指摘もある(山内ら 2010)。教師における「個人レベルの指導論」(梶田 1986)とワークショップ実践家の持つ「個人レベルの実践論」(森 2009)の間にある差異とは、教育目標や評価観の差異を根底に孕む。この差異は教師がワークショップに対し理解向上する妨げになる可能性がある。教授経験がある場合と無い場合でワークショップのファシリテーションについて学ぶ際に理解に差が出るという指摘もある(山内ら 2009, 2010)。

このような状況を踏まえ、筆者らは、ワークショップの現場と学校教育との間により一層建設的な関係が築かれていくことを目指し、SCSK 株式会社 CSR 推進室 CAMP (以下 CAMP) と共同研究を行った。本研究では現職の教員ではなく、高等教育における教員養成課程に焦点を当てる。その理由としては、教員養成課程は学校現場に入る前、個人レベルの指導論が形成されていく過程であるため、山内ら(2009)で示唆された葛藤が現職教員よりも起きにくいと考えられるからだ。

さらに、学校教育に携わる意志のある学生に対して、ワークショップに関する理解向上を支援するためには二つの課題とそれに向けた支援が必要だと考えた。第一の課題は、学校外の学習活動について認知の向上を促すことである。さらに、第二の課題として、学校教育と学校外での学習活動とを相対的に捉え、学校の中側から連携できる教員も育てる必要がある。これはワ

2012年4月1日受理

<sup>†</sup> Reina MORI<sup>\*1</sup>, Asako NAIKI<sup>\*2</sup>, Yoshiro KITAGAWA<sup>\*2</sup>, Toshiyuki KIHARA<sup>\*3</sup>, Wakio OYANAGI<sup>\*4</sup> and Yuhei YAMAUCHI<sup>\*1</sup> : Development of Courses for “Understanding Workshop” in Teacher Training Course

<sup>\*1</sup> The University of Tokyo 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033 Japan

<sup>\*2</sup> SCSK Corporation 2-26-1 Minamiaoyama, Minato-ku, Tokyo, 107-0062 Japan

<sup>\*3</sup> Osaka Kyoiku University 4-88 Minamikawahoricho Tennoji-ku, Osaka, 543-0054 Japan

<sup>\*4</sup> Nara University of Education Takahata-cho Nara-shi, Nara, 630-8528 Japan

ークショップの運営に対するリアリティが必要になるため、第一の課題に比べさらに時間をかけて学習支援を行う必要がある。

第一の課題に対しては、全ての教員が学習することが望ましく、第二の課題については、一部の関心のある教員が習得すべきことだと考えられる。そこで、小学校教員の免許取得において必修科目と選択科目があることに着目し、前者は必修科目として、後者には選択科目として、それぞれコース開発を行うこととした。

## 1.2. 本研究の目的

本研究では、ワークショップに関する理解向上に向けた教員養成用のコース開発を行うことを目的とする。これによって、学校と学校外の活動とを連携できる教員を養成することを目指す。この目的に対し、先に述べた2つの課題に対応し2パタンのコース開発を行う。

## 2. 実践1：ワークショップ参加体験から学ぶコース

### 2.1. 実践1の実施概要

この授業実践は、大阪府内にある教員養成系大学で開講されている選択必修授業の中の3回分を使って2010年6月に行った。本実践の目的としては、学校外の学習活動であるワークショップについて認知の向上を促すこと、とした。ワークショップ受講生は教育学部の教員養成課程に在籍する大学生19名である。

#### コースの構成と内容

コースの構成は、第1回が講義「ワークショップ概論」、第2回がワークショップ参加体験(CAMPあだなふだワークショップ)、第3回が講義「ワークショップと学校」となっている。

第1回目は、ワークショップの歴史的経緯や定義、内容の広がりについて映像を見せながら紹介した。第2回目のワークショップ参加体験では、「CAMPあだなふだワークショップ」というインタビューから名札的な立体作品を作るワークショップを実施した。受講生は参加者として体験した(図1)。第3回目には、ワークショップの特徴を授業に反映させた場合どのような活動が可能かという議論と、学校外で行う場合どのよ



図1 ワークショップ参加体験の様子

うな活動の可能性が考えられるか議論した。

### 2.2. データ取得の方法

第1回目講義開始直前にワークショップ経験に関する質問紙調査、第1回目講義中と第3回目講義中にワークシート課題を行った。本研究ではこのデータを分析する。

### 2.3. 結果

#### ワークショップに関する理解

第1回目講義開始直前の質問紙調査と第3回講義中のワークシートにて「ワークショップとはどのようなものか」自由記述で回答してもらった。第1回目講義開始直前には19名中14名が無回答であった。第3回講義中の記述について、内容をコーディングした結果、19名中18名がワークショップの特徴について授業の内容を反映した記述がなされていた。例えば、第1回目講義開始直前には「機能的学力の育成？」と回答記述した学生は、第3回講義中では「子どもたちに自由な発想をもって主体的にグループ活動による相互作用から1つのものを創り上げる」と記述している。このことから受講生のワークショップに関する理解は向上したと言える。

#### ワークショップに対する意識の変容

ワークショップに子供を参加させたいかどうかとその理由を第1回目講義開始直前の質問紙調査と第3回講義中のワークシートにて回答してもらった。その結果、子供を参加させたいとの回答が19人中8人から19人中16人に増加した。自分が体験してみることでのどのような活動かについてリアリティが湧き子供にも経験させてみたいと考えるようになった受講者が多かったと考えられる。

#### 学校教育との接続に向けた議論

第3回の「ワークショップと学校」では、ワークショップから授業案に接続させていくことについては、当初のねらい通りワークシートへの記述も多く(記述例:国語と関連づけて「物語を1つ選び演劇」、理科と関連づけて「未知の昆虫図鑑を創ろう!!」)、授業時間内に活発な議論が行われた。しかし、子供に体験させてみたい学校外学習について考えるという議論については想像できる活動が野外活動のようなものに限られるなど、広がり課題を残す結果となった。

## 3. 実践2：ワークショップ運営体験から学ぶコース

### 3.1. 実践2における実施概要

この授業実践は、奈良県内の教育養成系大学において開講された選択科目の講義として、2009年10~2010年2月に行った。本実践はワークショップのファシリ

テーションを運営体験から学ぶことを目的とした。受講生は教育学部の教員養成課程に在籍大学生2～4年生の10名と大学院生2名の計12名（受講生A～L）である。

### コースの構成と内容

第1回目から第3回目は講義形式で適宜質疑を挟む形式で進行した。第1回目では教育工学研究と学習環境デザイン論について、第2回目ではワークショップという手法の歴史的背景と実際にワークショップを企画・運営する際の留意点について扱った。第3回目は、第6回目・第8回目に扱うマイクロ・コンピュータ「クリケット」について開発経緯と構成主義について触れた。

第4回目・第6回目・第8回目はCAMPスタッフが運営する形式をとった。それぞれ学外実習の後、ふりかえりの講義を設けている（第5回・第7回・第9回）。第4回目にはCAMPで通常行われているファシリテーター研修を実施した。

第6回目は、CAMPクリケットワークショップをワークショップ運営体験1回目として小学生18名に対して行った。このワークショップは、参加者が2人1組になり、プログラミングを行い、クリケットとモーターと様々な素材の組み合わせで動くおもちゃをつくるという活動である。1回目ではCAMPスタッフ2名に加わるかたちで受講生からは希望者4名がファシリテーターとなった。残りの8名は少し離れた位置から記録をつけた。

第8回目は、運営体験2回目としてCAMPクリケットワークショップを小学生19名に対して行った。1回目にファシリテーターをしていない受講生が2回目のファシリテーターとなった。2回目ではCAMPスタッフはファシリテーターとして実践に加わらず、チーフファシリテーターを含め、全てのファシリテーターを受講生が担当した。1回目のファシリテーターは少し離れた位置から記録をつけた。第9回目は成果発表会を行った。

### 3.2. データ取得の方法

受講生には、(1)第4回目「CAMPファシリテーター研修」終了後、(2)第6回目「ワークショップ運営体験1回目」終了後、(3)第9回目「成果発表会」終了後、にレポートを提出するよう課した。

さらに受講生が、その後どのように学びを日常の中で深めていったかを探るため、コース終了後7ヶ月経った2010年9月、受講生に対し任意でグループインタビューを行った。インタビュー協力者は受講生12名中4名である。この他に、CAMPスタッフ1名が司会進行として在席している。時間は80分とし、協力者にワ

表1 自分の教育実践の中で活かしてみたいこと

受講生	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
第4回終了後	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第9回終了後	2	3	6	1	1	2	3	1	1	4	-	3
7ヶ月後	-	-	-	0	-	-	2	1	-	-	-	3

(-はデータの欠損を表す)

ークショップ運営体験1, 2 それぞれについて「印象に残っているエピソード」について語ってもらう形式とした。記録写真を用意し協力者がインタビュー中、適宜参照することを許可した。本研究では3回のレポートにおける記述とグループインタビューでの口述データを分析の対象とする。

### 3.3. 結果

#### ワークショップに関する理解

「ワークショップの運営から学んだこと」について、(1)第4回目終了後、(2)第6回目終了後、(3)第9回目終了後、(4)7ヶ月後、の記述・口述をコーディングし、視点を整理した。分析の結果、受講生はファシリテーター研修と2回の実践を通じ、ワークショップの運営について複数の視点で理解を深めていることがわかった。とりわけ、第9回目終了後のレポートには「教師とファシリテーター」「授業とワークショップ」の共通点・相違点に関して体験を通じて具体的に捉える記述が見受けられた。さらにグループインタビューの結果から、その気づきは7ヶ月経っても受講生の中に残っていることも示唆された。

#### 個人レベルの教授論への揺さぶり

「自分の教育実践の中で活かしてみたいこと」について(1)第4回目終了後、(2)第9回目終了後、(3)7ヶ月後、の記述・口述をコーディングし視点の数で整理した(表1)。

第4回目終了後のレポートには今後の展望について曖昧な記述も見られたが、第9回目終了後のレポートには、ワークショップやファシリテーションそのものについて言及するだけではなく、学んだことをどのように自身の教育実践に活かしていけそうかという具体的な記述が見られた。例えば、受講者Bの記述には、第4回目終了後には期待感のような表現であったのに対し、第9回目終了後には授業設計にどのような取り入れ方ができるかについて記述があった。

#### 例) 受講者B

【講義第4回目終了後】踏み込み過ぎず、離れすぎず、子供を信じて見守る。このすごく難しい立ち位置を身につけられたら、今後教師を目指す上でもすごくプラスになることは間違いない。やってみたいこととしては、

これから増える模擬授業や教育実習でファシリテーションを意識した授業展開を考えて実践してみたい。

**【講義第9回目終了後】**授業の中で子供たちの活動が多い場面ではファシリテーションを意識した関わり方をしたり、ある問題を解くときにワークショップのようにペアを作って、一緒に考えたりするのもいい。答えがわかる子は分からない子に教えることでより理解が深まるし、分からない子も友達に教えてもらうほうが教師に教えられるよりもとっつきやすいと思う。ペアになると発揮される子供の力を授業にも生かしたい。また、授業のメリハリをつけるためにもワークショップのような活動は使えると思う。

第9回目終了後のレポートには、就職後に教員として現場で役立てたいという記述（12名中6名）の他、これから行く教育実習に役立てたいという記述（12名中3名）、スクールサポート（注：学校教育現場において教職員とは違う立場で様々な支援・補助を行う活動）の活動の中に取り入れることができそうという記述（12名中3名）もあった。受講生の学年によっても受け止め方に差異があるものの、受講者はそれぞれの直面する身近な課題と引きつけて講義内容を理解していた。加えて、このコース受講を契機に行動変容した事例もある。Hはこの授業を契機に今まで行くことの無かったスクールサポートに行くようになった。

#### 例) 受講生H

**【第9回講義終了後】**大学の教室で講義を受けて、子供のことについて勉強するには限界があり、それだけを持って子供と接するのはたいへんなことだ。（中略）私は、教師になることを志望しているが、スクールサポートに行ったことがないので、実際に子供と触れ合ったのは教育実習のときが初めてだった。だから、周りの学生は、幼年教育ではない学生でも、スクールサポートなどでそれまでに子供と触れ合う機会があった人たちだったので、子供とすぐに打ち解けていたのに、私は最初、本当に子供との接し方が分からず不安でいっぱい、あまり積極的に関われなかった。これらの経験から、やはりスクールサポートはしておくべきだと感じた。スタートはかなり遅いが、来年度はスクールサポートをしようと思う。

**【7ヶ月後】**私は、ワークショップで一番学んだこと、得たことは待つという大切さであったんですけど、今幼稚園のスクールサポートに行っていて、待つって本当に大切だなと思って。小学生よりも幼稚園の方が幼いからほんとうに前からもっと時間かけて待つてあげ

ないと自分の考えもうまく言えないし、この時に待つてあげたら子供はちゃんと自分で解決するような道を見つけれられるから、待とうって。

Lの発言からは「個人レベルの指導論」への内省がかかっていること、教育現場やそこで関わる対象年齢が異なるという状況でさらに学習を深めていることが伺える。

#### 4. 考察・今後の展望

(1)実践1では参加体験を通じてワークショップへの認知度を上げ理解を高めることはできたが学校外の活動と学校での活動をつなげて理解するには十分ではなかったこと、(2)実践2では実際に運営者としての体験することを通じ、教師とファシリテーターという比較軸の中で深い考察を行うことが可能になったこと、が示唆された。教員養成課程においてワークショップへの理解向上を支援する取り組みを行うことは、学校外学習の現場と学校での教育活動とを結びつけるために重要だと考えられるとともに、学生が「個人レベルの指導論」（梶田 1986）を築き深めていく上でも有用だと考えられる。

本研究の一部は日本教育工学会第26回及び第27回において発表した。

#### 参 考 文 献

- 梶田正巳（1986）授業を支える学習指導論：PLATT. 金子書房、東京
- コミュニケーション教育推進会議（2011）子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組～. 文部科学省、東京
- 森玲奈（2009）ワークショップ実践家のデザインにおける熟達過程：デザインの方法における変容の契機に着目して. 日本教育工学会論文誌, 33(1): 51-62
- 山内祐平, 森玲奈, 村田香子, 北川美宏（2009）ワークショップファシリテーター研修における参加者の学習過程. 日本教育工学会第25回大会発表論文集：661-662
- 山内祐平, 森玲奈, 内記麻子, 北川美宏, 木原俊行（2010）ワークショップに関する理解向上を目的とした教員養成授業パッケージの開発. 日本教育工学会第26回全国大会講演論文集：525-526

(Received April 1, 2012)